
12 タイトル

オックスフォード大学が、教授の数を 162 名増員し、ほぼ倍増させると発表した。名門大学オックスフォードの財政が好転したのかと思ったら、講師を教授に昇格させるが、給料も何も変化なく、単にタイトルを変えるだけということだ。それでも、講師の不満の高まりを解消できるという。

何がそれだけ違うかということ、名前の前につく、タイトルが変わるのだ。講師の場合、ふつうは博士号をもっているから、タイトルはドクター。それが、プロフェッサーに変わる。電気代の請求から、何から何まで、宛名につけられるタイトルが変わってしまうのだ。

オックスフォードは、イギリスではケンブリッジと並ぶ名門大学で、他の大学の教授など本当の教授ではないというくらいの意識があるらしいが、その講師が他大学の、年齢も低く、格も劣っていると思う教授に対してプロフェッサー誰々と呼び、相手はドクター誰々と呼びかえす。これが屈辱的だというわけだ。

ダイアナ妃は、離婚にあたって、HRH (Her Royal Highness) というタイトルを失ったが、その他の実質的な地位の多くは維持することができた。いわば、オックスフォードの教授とは逆のパターンだ。依然として皇室のメンバーで、皇太子妃 (The Princess of Wales) であり、ケンジントン宮殿に住み続ける。

いったい、タイトルとはどんな意味があるのだろうか。機能的には、女性と男性の区別、女性の場合には、既婚と未婚の区別を明示できるというメリットがある。学生時代の私のように、リクルートから女性と思われて、女性用の就職案内ばかりが届くということはないだろう。既婚の女性と未婚の女性が識別できるということは、男性がデートを申し込むには便利かもしれないが、近頃は共通の Ms というタイトルも使われるから、あまり役に立たない。結局、実質的なメリットはほとんどなく、身分制の残存以外の何ものでもないということだろう。皇室を頂点とする身分秩序に、自らを位置づけ続けているわけだ。

公園の項でも言ったように、異なった社会の制度について、進んでいるとか劣っているとか評価するのは、非常に難しく、かつ危険なことだ。そうした一方的な評価によって、これまで歴史的にさまざまな悲劇が生じてきた。だが、

このタイトルという制度は、明らかに旧時代のもので、いずれは廃止されるべきものだと言っていいと思う。もし、仮に西洋の人々がタイトルを使用しておらず、逆に東洋の我々が使用していたとしたら、西洋の人たちは、東洋のいかにも遅れた制度として、おもしろおかしく紹介しただろう。

イギリスの人たちは、自分たちの文化を客観的に位置づけることが、少し苦手ようだ。他の先進的な文化から、必死でものを学ばなければならないという経験をしたことがない。その結果、自分たちの文化の短所を、真剣に意識するということが困難になる。これを、人間どうしの関係に置きかえてみれば、そういうタイプの人間がどういう思考様式に陥りがちかは、おおよそ見当がつくだろう。

いったん社会に根付ききった制度を廃止するのは難しい。イギリスの人たちは、日常的には、クリスチャン・ネーム（非キリスト教徒でもそういわれる）だけを使って、相互に呼び合うという便法を用いている。教授でも、通常は、クリスチャン・ネームで呼ばれる。しかし、それはあくまでも非公式の場合だけだ。皇族などのタイトルはともかくとして、教授や博士などというタイトルを、学問の世界の外にまで強要するという愚かなシステムが廃止されるのは、いったいいつのことだろうか。

1996 新納泉 著作権フリー

【付記】この文章を書いて以降、「ドクター」というタイトルは、日本ではむしろ重視が進み、大学教員に必要な資格のようになってきた。「タイトルはいずれ廃止されるべき」というここでの意見は、むしろ時流に合わなかったのかもしれない。もう少し長い目で見ることしよう。